

村 長	副村長	課 長	係 長	課 員	担 当

報 告 書

項 目 大塩地区 「みらいトーク！」 実施報告書

日 時 令和 8 年 7 月 16 日（木）18 時 30 分～20 時 00 分

場 所 大塩集会所

事 務 局 総務企画課長、企画係長、穴戸、大内、佐藤（路）

出 席 者 3 名

1 目的

令和 9 年度から始まる第 6 次総合振興計画の策定に向け、大塩地区の現状や将来への不安、残したいもの、10 年後に向けて必要な取組等について意見を聴取するため、大塩地区「みらいトーク！」を実施した。

2 実施概要

はじめに、村から第 6 次総合振興計画の策定趣旨や計画骨子の考え方について説明した。その後、参加者及び村職員が自己紹介を行い、地区との関わりや日頃感じていることを共有した。

意見交換では、大塩地区のビジョンマップを活用しながら、残したいもの、大切にしたいもの、心配なこと、今後あったらよいものなどについて話し合った。また、付箋を用いて意見を出し合い、地図上の場所や地区全体の課題・希望と結び付けながら整理した。

3 主な意見

（１）人口減少と地域のつながり

若い世代、特に若い女性が少なく、今後も人口減少と高齢化が進む中で、現在のインフラや地域活動を維持できるのかという不安が共有された。

今回の参加者が少なかったことについても、より多くの住民が集まることを期待していたが、これが現在の地域の関心や参加状況を表しているのではないかと率直な声があった。

若い世代や移住者を含め、地域の将来について話す機会をどのようにつくり、幅広い住民の声を拾っていくかが課題となっている。

（２）温泉と交流機会の減少

大塩裏磐梯温泉は、地区を代表する資源として挙げられた。以前は、地区や職場の忘年会、新年会、農作業後の慰労などで地元の温泉旅館が利用され、住民同士が交流する場にもなっていた。

現在は、温泉を地元の集まりに利用する習慣が少なくなり、地区内で飲食をしながら気軽に交流する機会も減っている。

温泉を観光客向けの資源としてだけでなく、住民の交流や健康づくり、地域活動に活用する視点が必要である。

（３）川や自然と子どもの体験

以前は、子どもたちが川を石でせき止めて泳いだり、魚や水生生物を捕まえたりするなど、川が身近な遊び場となっていたとの話があった。

現在は、護岸整備等により川へ下りにくくなった場所があることや、安全上の理由から学校でも川に入らないよう指導されていることから、子どもが川に親しむ機会が失われているとの意見が出された。

事故を防ぐことは必要である一方、地域の自然を実際に見て、触れて、楽しむ経験も重要である。安全管理を行いながら、川遊びや自然体験ができる場所や機会を検討する必要がある。

（４）歴史・文化資源と地域の自立性

大塩地区には、温泉や山塩に加え、柏木城跡、富山城などの山城、米沢街道、温泉神社等の歴史・文化資源があることが共有された。

山城については、城の構造や会津・伊達双方との歴史的な関係を知ること、より興味深い資源になるとの意見があった。また、しめ縄作りなど、現在も地区内で受け継がれている文化がある一方、担い手の減少により継続が難しくなるものについては、映像や記録として残す視点も必要である。

大塩では、祭りの屋台や盆踊りなども、業者に頼らず住民自身で準備してきたとの話があり、必要なことを自分たちで行う地域の自立性も大切な価値として確認された。

（５）歴史資源を生かした小規模な取組

山城や街道などの歴史資源を生かし、何百人もの参加者を集める大規模なイベントではなく、歴史に関心のある人を対象とした少人数制のトレッキングや案内ツアーを実施してはどうかという提案があった。

少人数であれば、受付や案内に必要な人員や経費を抑えながら、地域の歴史を丁寧に伝えることができる。近隣自治体の取り組みを参考にしながら、地域の住民や歴史に詳しい人が案内する仕組みが考えられる。

また、地区の歴史や文化は、外部から人を呼ぶためだけでなく、地域の子どもや住民自身が大塩の価値を知るためにも活用する必要がある。

（６）移住者と地域をつなぐ仕組み

移住者が地区へ入る際に、行政区、組、共同作業、草刈り、地域の費用負担など、その地区特有の仕組みや習慣が十分説明されていないとの意見が出された。

移住後に初めて地域活動や負担を知ること、「想像していた暮らしと違う」と感じたり、既存住民との間で認識の違いが生じたりする場合がある。

移住希望者には、地域の良い点だけでなく、生活上の負担や地域活動についても事前に説明する必要がある。そのため、行政の移住担当者と地区住民の間をつなぎ、地域の実情を伝える人や仕組みを整えることが求められている。

（７）廃屋・草木と所有者不明土地への対応

温泉神社周辺には、老朽化が進んだ建物が残されており、景観、安全、防犯上の問題として早期の対応を求める意見があった。

また、国道沿いの斜面や土地では、草木が伸びて見通しが悪くなっている場所がある。一方で、個人所有の土地や立木については、所有者の許可なく伐採することができず、登記上の所有者が亡くなっている場合には、相続人の確認にも多くの時間と費用が必要となる。

地区だけでは対応できないため、行政による所有者調査への支援、相談窓口、対応手順の明確化などが必要である。

(8) 施設利用と行政の共創姿勢

高齢者が坂を上ることが難しいため、地区の総会等で活性化センターの利用しやすいスペースを借りたいと要望した際、休日の管理体制や人件費などを理由に実現しなかった経験が語られた。

住民からは、要望に対して最初から「できない理由」を並べるのではなく、条件の変更や代替案を含め、どのようにすれば実現できるかを一緒に考えてほしいとの強い意見があった。

最終的に実現できない場合でも、検討の過程や理由を共有し、住民と行政の双方が納得できる形で結論を出すことが重要である。行政には、住民から相談を受けた際に、対話を重ねながら可能性を探る姿勢が求められている。

また、公民館で行われている「ふらっと事業」やフリーマーケットなど、子どもから高齢者まで気軽に参加できる取組が評価された。こうした活動を継続し、新しい地域の交流拠点として育てていくことが期待される。

4 総合振興計画への反映に向けた視点

- ・若い世代や移住者を含め、幅広い住民が参加しやすい対話の場づくり
- ・大塩裏磐梯温泉を住民の交流や健康づくりにも活用する取組
- ・安全に川や自然と触れ合える子どもの体験機会づくり
- ・温泉、山塩、山城、街道、神社等の歴史・文化資源の保存と活用
- ・継続が難しくなる地域行事や技術の記録・映像保存
- ・少人数制の歴史トレッキングなど、負担が少なく質の高い体験型事業

- ・行政、移住支援者、地区住民をつなぐ移住受入れの仕組みづくり
- ・移住前に地域活動、共同作業、費用負担等を説明する仕組みづくり
- ・危険な廃屋や老朽化建物の早期対応
- ・所有者不明土地や支障木に関する調査・相談支援
- ・住民の要望に対し、実現方法をともに検討する行政運営
- ・フラット事業等を生かした、気軽に集まれる地域拠点づくり

5 まとめ

今回の対話では、人口減少や高齢化、交流機会の減少、廃屋や草木の管理、移住者と地域との認識の違いなど、大塩地区で暮らし続けるうえでの課題が共有された。

また、施設利用に関する過去の対応を例に、行政ができない理由を先に示すのではなく、住民とともに実現方法を考えてほしいという率直で厳しい意見が出された。住民と行政の信頼関係を築くためには、相談を受け止め、検討の過程を共有し、代替案を含めて一緒に考える姿勢が必要である。

一方で、大塩裏磐梯温泉、山塩、山城、米沢街道、温泉神社、しめ縄作りなど、豊かな歴史・文化資源と、地域のことを自分たちで行ってきた住民の自立性も確認された。これらは、大塩地区の将来を考えるうえで重要な基盤である。

今後は、歴史資源を生かした小規模な体験活動、川や自然に触れる機会、気軽に集まれる交流拠点などを、無理なく継続できる形で進める必要がある。あわせて、移住者へ地域の実情を丁寧に伝える仕組みを整え、移住者と既存住民の双方が安心して暮らせる地域づくりにつなげることが重要である。

以上